

迫る | つながる | たのしみ | 気になる

復興に尽力する宮本英樹さん

← 一面からつづく

ヘルメットをかぶり、日焼けした顔で動き回る。それが米災害復旧コンサルタント会社「ミヤモト・インターナショナル」(MI)社長、宮本英樹さん(60)が現場で見せる姿だ。今は、国連機関の依頼で、ウクライナで破壊された建物の調査や修復を進めている。

アメフトで渡米

時計の針は高校2年の時までかのぼる。アメリカンフットボールをテレビ観戦しているうちに魅了され、競技したことはなかったが「米国に渡り、プロ選手になる」と決意した。身長は170センチと選手としては小柄だが、100メートルで11秒4を後に出すほど、足には自信があった。目指すはショート・アンド・フアースト(小柄だが、高速)のプレースタイル。長いパスを敵陣深くでレシーブするプレーヤーになれると信じ切った。

迫る

道が開ける機会は偶然やってきた。ある学会に参加すると自然災害のリスク管理で世界的に知られたピーター・ヤネフさんに出会った。顧問就任を懇願すると「私の言うことをしっかりと聞いてくれるなら」という条件で了承してくれた。ヤネフさんは国際的な人脈を宮本さんに紹介するとともに「地震が起きたら即座に現地を『偵察』し、状況を把握することだ」と助言した。



インタビューに答える宮本さん
東京都上京区ア7月、久保裕

プロなれず「プランB」

で活躍することだが、英語は落第点近く。両親に渡米の計画を打ち明けると強く反対されたが、意志は揺るがなかった。

英語塾に通い詰め、1982年に選手育成で知られるカリフォルニア州の短大に入学できた。校内に日本人はいなかったが、あえて飛び込んだ。気候にも苦しい。乾燥地帯で夏の気温は40度を超える。プロテクターを着けながら、水と塩分タアレットをガンガン飲んだ」という猛練習を続けた。ジャンプしている時に体当たりされながらもボールを確保する練習をしてきた時に悲劇は起きた。足の靭帯が断裂。診断した医師から宣告された。「アメフトは諦めた方がいい」と

とてつもなく落ち込んだ。ただ、切り替えの早さが宮本さんの真骨頂なのかもしれない。1週間後には入生の「プランB」としていた「建築物の構造力学」の道に進むことを決めた。物理が好きで興味があった分野だ。短大から力

リフォルニア州立大チコ校に転籍した。学費を稼ぐため、森林消防士や金探掘、学生寮管理で働きながら学んだ。

渡米から8年後ようやく卒業し、90年に就職したのは社員5〜6人の建築会社だった。エンジニア(技師)として働いたが、就職してから約5カ月後に解雇通告を受けた。社長からは「未熟だ」と理由を告げられたが、宮本さんは「今は駄目だけど、絶対よくなる。信じてください」と懇願し、謝意させた。

その頃、建築構造のセミナーに出席し「制震」や「免震」など最新の耐震技術に接し



モロッコ地震で被災した山間部のタフェガフテに入った宮本英樹さん。「まず現場へ」を実践する＝9月、ミヤモト・インターナショナルの提供動画から

た。制震は、伸縮オイルで揺れを吸収する仕組みで、免震は、揺れを逃して建物への影響を軽減する。「これはすごい」と率直に感動し、すぐに専門家に電話を入れ指導を熱心に頼むと、丁寧に教えてくれた。

日本人だからと軽視されることはなかった。「建築技師」というのは保守的で、新しい技術をなかなか取り入れない傾向がありました。それでも若い私が制震などに関心を持っていたので、知識を分けようと考えたのかもしれない。また、こころごと打ち込む日本の勤勉さが珍しく、

高いことが分かった。石綿は日本などでは使用できないが、ウクライナでは「破壊された学校の屋根にも石綿が含まれていた」と宮本さんは言う。MIは、戦時に対応した石綿対策マニュアルをウクライナ語で作成し、復興での活用を促している。

国連機関が注目

06年からは、トルコで約2000棟もの学校や病院、文化遺産の耐震補強に力を尽くした。現地の技術者に制震や免震の技術を伝えることで国連機関などの注目を集めることになる。

この支援が、今年2月に発生したトルコ・シリア地震で生かされた。補強事業での技術者養成や法令改正などの影響を受けて免震が施された12の病院は無事だと分かったという。現在、米国とトルコ政府の協定に基づき、MIは中層ビルなど5000棟以上の耐震性チェックなどを担っている。

宮本さんは「地震が起きたらすぐに現地偵察」の助言も実践し、10年のハイチ大地震などの発生直後に現地入りした。今年9月に発生したモロ

「即座に現地偵察」実践

ッコ地震でも現場に駆け付けた。今、ウクライナでは集合住宅など7000棟の修復を任されているが、現場で見えてくるものがある。避難者たちには疲労がたまり、自宅に戻る日を持ち望んでいる。学校や幼稚園の被害も深刻で、危険を恐れて生徒の多くが通わ

なくなった学校もあった。住民の安全優先の観点で情報を集めると、多数の建物に発がん物質のアスベスト(石綿)が含まれている危険性が

特にリスクが高いと見ているのは、石綿を含む建物の大量のがれきた。「住民が多く住む場所に放置されている」と宮本さんは懸念する。焼却するなど処理を要すると石綿が

飛散してしまう。埋設型の処分場が必要で、ウクライナの環境保護・天然資源省の担当者との協議を始めている。一方、日本政府もがれき処理で国際協力機構(JICA)を通じて支援を決めている。宮本さんは既にキーウ(キエフ)の日本大使館と緊密に連絡を取り、協力している。

2002年に社名を「ミヤモト・インターナショナル」と改名した。海外の仕事はしておらず、周囲は突然の社名変更をいぶかかった。この時、宮本さんは「国際的な仕事をやりたかったしできる」と、新たな目標に据えていたのだ

むしろ専門家たちに気に入られましたと振り返る。一方、自身は「信念を持って少しずつ学んでいくは、一流になれる」と思い、技術を自分のものにしていった。

宮本さんは現在、トルコ、モロッコ、アフガニスタンの震災現場を行き来しながら、ウクライナでの復興支援を続ける。「私たちは戦争を止められないが、住民が家、学校、病院を再建するのを助けることはできる」という信念を胸にぞして、ハードな活動は、住民からの「ありがとう」との一言が支えている。

今回の取材は

大島秀利(専門編集委員)

1986年入社。福井支局、大阪社会部などを経て現職。原発、労働環境を担当。著書に「アスベスト」(岩波新書)。